

■書評

ペーター・タール編著 芦田亘・津波古充文訳

『スミス経済学の歴史——経済的自由主義の系譜』

(昭和堂, 1981年)

Adam Smith gestern and heute: 200 Jahre “Reichtum der Nationen”

Hrsg. von Peter Thal unter Mitwirkung von V.S.Afanasev, A.V.Anikin, H.Lehman und anberen, Detlev Auvermann KG, Glashiitten/Taunus, 1976.

中谷武雄

I 本書の特徴

アダム・スミスの主著『国富論』は、1976年に刊行200周年を迎えた。この年を前後して、世界各国で、数多くの記念事業が遂行された¹⁾。これらの事業は、経済危機と経済学の危機に直面している資本主義諸国にかぎらず、社会主義諸国においても活発であった²⁾。そして本書は、現在あまり紹介されていない社会主義国でのスミス研究の、体系だった専門的著作のおそらく日本で最初といってもよい邦訳書である³⁾。このてんからだけでも、本書の邦訳の労をとられた二人の訳者がはたした役割は、たんにスミス研究者だけでなく日本の学界全体にとっても、大変大きいものである。

『国富論』200年を記念するとはいっても、資本主義国と社会主義国とでは、その姿勢が異なることはいうまでもない。資本主義国でスミスが復活した⁴⁾とはいえ、前述した状況に規定され、それは暗中模索での原点復帰指向の強化、ないしはケインズ主義を批判する一手段として古典派の権威を援用するというようなものである。それにたいして社会主義国（の代表としての本書）では、スミス研究をマルクス＝レー

ニン主義の理論的・イデオロギー的攻勢の一部として位置づけ、マルクス主義の諸源泉をさらに明確にし、この源泉とマルクス、エンゲルス、レーニンおよび今日のプロレタリアの世界観と理論一般との関係を理解しようという、積極的な、また明確な課題意識にもとづいている。これが第二点。

第三は、本書が、『国富論』200年の記念事業として、マルチン・ルター大学（ハレ・ヴィッテンベルク）とハレのドイツ民主共和国科学アカデミー（本書は同アカデミー経済学中央研究所の委託を受け編集された旨が記載されている）共同で開催された国際科学者コロキウムの成果⁵⁾を受けて、ドイツやソ連など数カ国にわたる10人の著者が専門的知識に応じて、共同研究方式の成果として生まれたことである。しかもたんに個別論文の寄せ集めではなく、単一のプランにもとづいて、部分的には複数の著者による共同執筆の形成による集団的労作として、体系だった一冊の書物としてまとめられている。

II 本書の構成と内容

本書は四部構成である。I「アダム・スミス——ブルジョア政治経済学上の最も重要な結

晶点」は、スミス経済学の概論である。これは、全体の40%をしめている。Ⅰ—①「アダム・スミスの活動の歴史的背景」をおさえたいうで、Ⅰ—②「アダム・スミスにおける政治経済学の新しい質」として、再生産過程の総体、“二重の仕事”，経済的自由，労働——価値——利潤，分業——蓄積——進歩の五点にふれられている。すなわちスミスの経済学への貢献を、この五点から論じている。このスミスによる新しい到達点か、19世紀にどう継承・発展ないし歪曲されていくかを、リカード、空想的社会主義、シスモンディ、セーとマルサスの四点から分析（Ⅰ—③「アダム・スミス——19世紀の最初の三分の一期におけるすべての政治経済学の理論的源泉」）したうで、スミス学説の受容史を、ドイツ（Ⅰ—④）とロシア（Ⅰ—⑤）で展開している。全体として、マルクスにいたるまでの経済学発展史におけるスミスの位置づけといえよう。

Ⅱ「マルクス主義の政治経済学——『諸国民の富』の進歩的認識の保存と弁証法的な止揚」は、Ⅱ—①「アダム・スミスからカール・マルクスにいたる政治経済学の歴史的な発展における連続性と非連続性」を概括したうで、Ⅱ—②「マルクス主義経済学の一源泉としての学説」で、価値論の諸問題、労働と資本との交換の問題について、剰余価値の具体的諸形態と資本の問題、経済分析の方法論上の諸問題の四点を分析している。ここではスミスの階級的な立場の問題にもふれられ、前述のハレでの国際科学者コロキウムでの日本からの参加者である松川氏の報告が、高い評価を受けている。⁶⁾ スミスが、ブルジョア的な進歩を奨励し、その意味で「進歩的なブルジョア・イデオロギーの立場」にあることが、重要であり、スミスの商人やマニュファクチュア工場主への批判に目を奪われて、全体的な評価を誤まってはならないことが指摘されている。

Ⅲ「アダム・スミスと現代ブルジョア経済学」は、現代のブルジョア経済学がスミスを参照す

るときの強調点を、次編のマルクス＝レーニン主義経済学と対比して、分析している。Ⅲ—①「克服されていない古典学派——今日のブルジョア経済学とアダム・スミスの関係の特徴」では、両者の複雑で錯綜した関係が明らかにされ、ブルジョア経済学がスミスの理論的遺産をいかにその思想的意義を低下させ、その科学性に疑念をはさもうとしているかがのべられている。Ⅲ—②「スミスの経済的自由主義と現代」では、スミスとリカードの存命中の時代では進歩的で歴史的な作用をはたした経済的自由主義が、非歴史的に現代化されて、国家独占資本主義体制の弁護論としての役割をはたしていること、また社会主義的計画経済の経済的自由主義にたいする優越性を隠蔽するものとして、「新古典派」とケインジアン論争も位置づけられている。Ⅲ—③「現代ブルジョア経済学によるアダム・スミスの根本的な政治経済認識の歪曲」は、とくに価値論（「価値のパラドックス」や「生産要素論」）と経済成長論の二点から、スミスにおける資本主義経済の因果関係の認識の無視ないし俗流化をのべている。

Ⅳ「今日のマルクス主義政治経済学にとっての『諸国民の富』における理論的な手がかりと刺激——一つの選択」は、記者あとがきにもあるが、本書の一つの圧巻である。それは、現在の社会主義経済の理論や問題について、積極的にスミスを位置づけようと試みられているからである。Ⅳ—①「科学史および理論史の現代的意義」では、弁証法的＝史的なアプローチの重要性を確認して、Ⅳ—②「アダム・スミスにおける国際分業と外国貿易」、Ⅳ—③「アダム・スミスの生産的労働と不生産的労働——社会主義政治経済学にとっての思想的な刺激」と、二つの問題を論じている。社会主義経済の発展という新しい理論的な課題のもとで、いかにスミスが研究されようとしているのかということがかえって大変興味深い。

Ⅲ 若干のコメント

はじめに、経済的自由主義の問題についてとりあげよう。これは、本書のスミスの経済学の理解と、さらに訳者あとがきとの二つにかかわる。訳者あとがきには、本書の原題——直訳すれば『アダム・スミス——過去と現在』——からの変更についてふれられている。そして訳者によれば、本書の特徴と力点をうかがいあがらすために、副題に経済的自由主義という言葉をとくに挿入した旨が記されている。すなわちスミスの経済思想の意義と限界は、経済的自由の理念に集中されており、その意味を歴史的な背景のもとであきらかにすれば、スミスの経済学の評価についてはおおむね適切な結論がえられる、という理解である。

たしかに現在の資本主義の危機に直面した条件のもとで、スミスへの復帰指向が強まり、スミスの思想の面的な、また歪曲化した強調をもって自説の根拠づけにしようとする風潮のなかであって、スミスの経済的自由主義の考え方は再確認する必要があるとおおいにある。経済学史の研究が、ストレートに現実の問題とぶつかる事例でもあり、当面の課題としても、議論がおおいかわされるべき問題であろう。しかしスミスの経済思想——これは標題で「スミス経済学」といわれているが、この標記は内容が不明確で、正確さを欠くうらみが残る——を経済的自由主義に集中させていくのは、『国富論』第一編に「最大の意義」(20ページ)を置く著者の考えとも、少しずつくるのではないか。

経済的自由の考えは、歴史のまた資本主義の発展段階が異なるにつれ、異なった意味あいをもつものであり、社会の発展にとって進歩的な役割もはたせばまた反動的な役割もはたす。こうした二面的な作用をもつのは、それがブルジョア的なイデオロギーであるいじょう当然のことである。スミスをブルジョア・イデオログと位置づけ、その特徴を経済的自由に求めるのは

妥当であろうが、「スミスが、現代に至るまでさまざまな政治経済学の諸潮流から、それぞれ一定の正当さをもって、出発点としてもとめられているという、科学的にきわめて注目に値する事実を理解するために」(1～2ページ)は、イデオロギーと理論とは区別して、科学的な経済学の根幹としての価値論、すなわち労働価値論におけるスミスの位置と立場とに求めなければならぬであろう。

本書の立場は、スミスの「二重の仕事」の意味と役割を明確にし、現在のブルジョア経済学が、スミスの非科学的で通俗的な側面を根拠にしたり、科学的な側面の意義を歪曲したり骨抜きにしようとする試みに対応して、科学的な側面を積極的に継承・発展させることの重要性を強調することである。こうした観点に立てば、経済的自由主義——自由という言葉も歴史的・社会的色あいが濃い——が響きとして、またニュアンスとして持っているものは、総体としてスミスを前向きに見ようとするのではなく、古い遠い時代の後向きの姿勢をもあわせもつようなものとして理解される余地⁷⁾があり、スミスを象徴するものとしてはふさわしくはないのではないだろうか。スミス経済学=経済的自由主義という表現には、いろいろと考えなければならぬ問題が多いように思われる。

本書の意図として、スミスの評価を「二重の仕事」という側面から分析し、その立場を規定したブルジョア・イデオログとしてのスミスの一つの特徴点を、経済的自由に求めていることは明白である。しかし著者も忘れずにつけ加えているように、スミスの経済的自由主義は、政府の役割と機能を前提としてこそ成立するものである。分業の発展は、レッセ・フェールのもとでもっとも効率的に実現されるが、これは分業の発展による社会的弊害への政府の対応があつてこそ、そういえるものである。スミスの経済学の新しい質の第一に「再生産過程の総体」をあげるなら、そのなかでの国家の位置づけとい

うことに分析を進めなければならないであろう。経済学の体系として、国家を分析する次元の差は存在するであろうが、スミスが現実には財政論や国家論を展開しているいじょう、それを無視してはスミスの経済学の総合的な理解とはいえない。経済的自由とは国家的規制などと対応するものであるから、相手を十分に分析しないで一方のみを強調すれば、片手落ちになるのではないか。

このてんは訳者あとがきでも、本書のなかで「安価な政府」論や民主主義論が十分に展開されていないと指摘されている。⁸⁾ 経済的自由も、確固たる民主主義の観点のもとで展開されてこそ、もっと積極的な意味をもつであろう。これらのことを考慮に入れると、スミスが国民の富を増大させるというやや不明確な観点からではあれ、その主体である労働者に向けた視線をもっと重要視するべきであると思われる。分業の発展による労働者の白痴化は、スミスにとって大きな問題であったが、この問題の本質は現在でも解決されていない。労働疎外の問題として、これは資本主義国ではいうにおよばず、社会主義国においてもある面では存在し続けているといえるであろう。資本主義から社会主義への移行によって、この問題がどう解決されようとしているかという展望が認識されていなければ、なんのための移行か、経済的自由主義にまさる社会主義的計画経済の利益の本質とはなにか、という問題もうかんでこようというものである。

現実に社会主義国で生活している人びとの状態や労働、また政治活動への参加など、ある意味では民主主義がどう発展し、そのなかでスミスの思想がどう生きているかという、われわれが一番知りたいと思うてんについては、本書は十分には分析がおよんでいないように思われる。このことが社会主義国での学史を中心とする経済学の研究において、どういう影響を与えているか、興味深く思われる。

注

- 1) 岡本裕次「アダム・スミス『国富論』刊行200周年記念行事資料抄」(『三重法経』第38号, 1977年10月)などを参照。
- 2) ドイツ民主共和国(東ドイツ)をはじめ、ソ連、ユーゴスラビアおよびポーランドなどでシンポジウムが開催された。なお雑誌掲載の記念論文は、細川元雄「『国富論』刊行200周年記念論文(外国)一覧」(『経済資料研究』第12号, 1977年8月)ならびに「同補遺」(同上第13号, 1978年10月)を参照。その後のものとして Stefan Heretik, *Smith's Wealth of Nations After 200 Years, Czechoslovak Economic Papers*, No.18, 1980.
- 3) アンドレイ・アニーキン『アダム・スミスの生涯』(松川七郎監修, 小檜山愛子訳, 勁草書房, 1975年)は啓蒙書として位置づけられるが、同書は、ソ連でのスミス研究の一端を知るうえでは興味深い。イ・アレシナ「アダム・スミスの学説と現代資本主義」(ソ連科学アカデミー・世界経済・国際研究所訳編『世界経済と国際関係』第36集, 1977年3月)も参照。
- 4) Vgl. Horst Clans Recktenwald, *An Adam Smith Renaissance anno 1976? The Bicentenary Output — A Reappraisal of His Scholarship*, *Journal of Economic Literature*, Vol.16, No.1, March 1978.
- 5) Vgl. Peter Thal, hrsg., *200 Jahre Adam Smith' „Reichtum der Nationen“ International Kolloquium vom 30.9. bisl. 10. 1975 in Halle DDR*, Detlev Auvermann KG, Glashütten/Taunus, 1976.
- 6) 氏の考えの一端については、松川七郎「アダム・スミスの社会的立場に関する問題によせて」(中央大学商学会『商学論纂』第19巻第1号, 1977年6月)を参照。
- 7) 自由主義思想の残滓=残りかす (aftermath) としての経済的自由主義というラスキの規定を

『スミス経済学の歴史——経済的自由主義の系譜』

参照。Cf, Harold J.Laski, *The Rise of European Liberalism*, 1936. 石上良平訳『ヨーロッパ自由主義の発達』(みすず書房, 1951年)参照。

意味するもの——アダムスミスの分業論(2)」(高知短期大学『社会科学論集』第45号, 1983年3月)もあわせ参照されたい。

(なかたに たけお 高知短期大学)

8) 拙稿「『国家の空洞化』や『安価な政府』が

現代経済・財政理論研究会 第2回例会

◎ 本間照光・小林北一郎著

「社会科学としての保険論」 汐文社, 1983年の検討

◎ 7月8日(金) 午前10～12時

◎ 於 京都大学経済学部 第16演習室

なお御連絡は, 事務局 藤田安一(610-11 京都市西京区大枝南福西町1-1, 48-206)まで, お願いします。